

density 所見を呈した。MRI では腫瘍は指摘できなかった。DSA では腫瘍濃染像を認めず、CTAP で明瞭な perfusion defect を認めた。【病理所見】診断確定のため超音波誘導下腫瘍生検を施行したところ、明らかな悪性所見は得られず一部に granuloma の集簇像が見られた。非腫瘍部は Scheuer I 期の所見であった。【まとめ】本症例は原発性胆汁性肝硬変の経過中に肝腫瘍病変を認め、画像診断にて高分化型肝細胞癌を否定できず、生検にて肉芽腫の集簇がみられた貴重な症例と考え報告した。

9) 術後出血の長期予後

三浦 努・関 裕史
加藤 毅・木村 元政
酒井 邦夫 (新潟大学放射線科)

【目的】術後出血に対する TAE を施行した症例を対象にし、原疾患その他の背景因子と、再出血の有無、生存期間等の予後について検討した。

【方法】1987年から1993年までの7年間に術後出血によって TAE を施行した13症例について検討した。

【結果】13症例のうち1例は、膵炎による偽嚢胞の術後出血した症例に対しての TAE 症例であり、10年間生存し再出血等なく経過している。1例は早期癌の術後だが、感染のため DIC+subshock の状態で、他は全例進行癌に対する拡大手術後の出血であった。長期生存例以外の12症例の平均生存期間は約128日で、いずれも癌死や他病死であった。再出血した症例は2例あり、いずれも DIC+subshock の状態で、先行する緊急の止血手術があった。1例は再度 TAE して止血したが、DIC のため6日後死亡している。1例は TAE 後すぐに止血手術を行ったが止血しきれず、3日後死亡している。術後、TAE 前に感染または DIC のあった症例は4例あり、その平均生存期間は18日であり、短くなっている。

【結論】感染や DIC の存在がなければ術後出血に対する TAE の長期予後は原疾患に依存するものと考えられた。

10) ヘルカリ CT による乳癌の乳管内進展巣の診断

植松 孝悦・酒井 邦夫 (新潟大学放射線科)
椎名 眞・小林 晋一 (新潟県立がんセン)
清水 克英・笹本 龍太 (ター放射線科)
佐野 宗明・牧野 春彦 (同 外科)
本間 慶一 (同 病理)

【目的】ヘリカル CT (HCT) を用いて乳房温存療法で問題となる乳管内進展 (DS) と多発の検出能について検討した。DS については乳房撮影 (MMG) とも比較した。【方法】造影剤 90 ml を 1.5 ml/秒で投与した場合の至適スキャン開始時間を乳癌12症例で検討した。その結果をもとに造影剤注入開始後70秒に X線ビーム幅 3 mm, pitch=1 で腫瘍と乳頭を含める範囲を HCT にて撮影した。対象は95年6月から12月までに病理学的確定診断のついた浸潤性乳管癌84例である。

【結果】DS and/or 多発の sensitivity 76.3%, specificity 89.1%, accuracy 83.3%, DS は MMG の false negative 症例の40% を HCT により診断された。

【結論】1. HCT による DS と多発の診断は可能であり有用である。2. 三次元画像は術者の病変把握と患者への説明に有用と思われる。

II. 特別講演

閉塞性動脈疾患に対する経皮的血管形成術の最近の進歩

弘前大学医学部放射線医学教室助教授
淀野 啓先生

第37回新潟画像医学研究会

日 時 平成9年6月14日 (土)
午後2時~6時
会 場 長岡商工会議所

I. 一般演題

1) 螺旋走査型 CT の有用性

村上 直人・高橋 祥 (燕労災病院)
佐野 克弘 (脳神経外科)

螺旋走査型 CT の脳神経外科における有用性を検討し、報告した。